山口県萩市見島方言についての小報告（その二）

岡野信子

はじめに

小稿は、日本海上の小孤島、見島の方言についての第二の報告である。さきには、語アクセントについて報告させていただいた。今回は、音声・表現法・語彙の各分野における諸事実を報告させていただく。いわゆる〝地方（じがた）〟の長門方言との比較を常に心掛けながら、稿を進めていきたい。

本稿の資料は、昭和四五年三月、八月、四六年八月の、計二五日間に得たものである。見島の地理的・歴史的な概況については、本誌第六号を御覧いただきたい。島の三つの集落である、本村（ほんむら）・浦（うら）・宇津（うづ）では、その方言状態にいくらかの差違があるが、今回はそのことには触れずに、三集落の共通の事象を取上げていく。資料は主として本村のものによった。浦または宇津で得た事象を取上げた場合は、〈浦〉・〈宇津〉と注記した。なお、以下の記述の中で、（）でかこんであるのは調査者の補注であり、《》内は話者の説明のことばである。

1　音声面

1・1　文アクセント

見島方言の文アクセント傾向として、以下の四つの型を指摘することが出来る。

（1）下降型

下降型には、┌└、└┌、└┘、┌┐の三種がある。すなわち、文頭の第一音節だけが高くて、二音節めから下降するもの、二音節めで上昇して、三音節めから下降するもの、高音部が第二、第三の二音節にわたるものの三種である。

。トラン　カ。　取らないか。

。ワカリマセンイ　ノー。　わからないんですよ。

。ツカイマセン　ノー。　使いませんねえ。

これは防長方言一般に顕著なアクセント傾向である。この型は、話者の胸中に〝ていねい〟意識が働くときにとくに顕著にあらわれる。青少年にはあまり用いられない。

（2）波動型

同一または相似の話部アクセントが、二回以上くりかえされると、波のうねりを思わせる文アクセントが形成される。この型は見島方言文アクセントの四類型中で、もっとも頻繁に聞かれるものである。

。ソンナカニ　イレル。　その中に入れる。
。オトコ　サンニンニ　オナゴ　サンニン。　子供は男が三人に女が三人です。
。バンオ　シテ　デン　ホージャ。　老人は留守番をして外へ出ないのだ。
。オーキナ　イエデ　バーサンガ　ヒトリジャカラ　タイガイトデンナカロー。　大きな家でお婆さんが一人だから、ずいぶん寂しいだろう。

二音節め、あるいは二、三音節めの高まる波がくりかえされるのにくらべると、次のように、第一音節の高い波のくりかえされるものは少ない。

。ジコジコ　ナンジャカラ。　じわじわと、なに、変ってきたから。

この波動型文アクセントは、長門方言域中では、きこえの特異なものである。しかし、「ヨー　ニチョルソヤロー。（よく似てるんだろう。）」（萩市越ケ浜）なども、きこえの違いはあるとは言え、同じく波動型と見ることが出来る。一方、波動型文アクセントを分析してみる時、さきの下降型文アクセントを話部アクセントとして、それを二回以上くりかえした文と受取ることも出来る。一見、非長門的とも見られる文アクセント傾向は、実は長門方言の基本的傾向にかかわるものであると言えようか。

(3) 文末高音隆起型

。イマ　ツイタ。　いま着いた。
。アズッチョル　カノ。　てこずっているかね。

次のように、最後の一音節は低くなっても、文末部に高音を持つものは、同じくこの型と見ることが出来よう。

。ジョーニ　カッチョリマス　ガノー。　たくさん刈っています がねえ。
。ソノ　ウチ　コーデー。　そのうち来るだろうよ。
。ドー　ショー　カイ。スマン　ノー。（いつも魚をもらって）どうしょうかしら。すまないねえ。

文末の高音隆起に長呼があわせ行なわれると、話者の訴えかける気持の強くあらわれた文となる。

。チート　ミセテー。　私にも少し見せてちょうだい。
。アス　タベルー。　あす食べるよ。

(4) 高音連続隆起型

文中に高音の連続する型も認められる。

。オハヨー　ゴザイマシタ。　お早うございます。
。オエロー　ゴザイマショー。　お疲れでしょう。
。マルデ　ロクナ　コトワ　ナイ。　いいことはちっともない。
。……シゴトガ　コタエテ　ナンデー……。　（年をとると）仕事が体にこたえて、あのねえ……。

この型は先述の三型ほどに優勢なものではない。

以上、見島方言文アクセントの四つの型をあげた。この中で、もっとも耳を打つのは波動型である。それは、左のような、近畿地方や、あるいは長崎地方の文アクセントへの似寄りも思わせる。

。モー　セ|ンド　タベ|タ。　（藤原与一先生著『方言文法の世界』――近畿地方河内村――）

。カマボコバ　モラ|オー　カ。　（愛宕八郎康隆氏「長崎地方の文アセントの特質傾向」長崎大学教育学部人文科学研究報告第十八号）

さきの語アクセントの報告の際にも、一、二音節語に近畿アクセント的な傾向が認められること、また多音節語では、アクセントの型が中高一型になろうとする勢のあることを述べた。このような語アクセント傾向と文アクセント傾向とのかかわりについても、今後考察を進めていきたい。

1・2　語音と話部音声

(1)　〔ai〕連母音の同化と不同化について

〔ai〕連母音が、〔æi〕・〔æɛ〕・〔a:〕・〔ɑ:〕となることは、山口県方言の一特色をなしているが、見島では、同化しないのが一般である。すなわち、ユワ|イ（祝）・モラ|イマセン・タカ|イ・カエリタイ（帰りたい）であって、タカ|ャイ・タカ|ーなどとはならない。ただし、次のように、同化の事実の認められることもある。

。ダラニ　アラ|ー。　たくさんあるわい。

。イヤ|ー　セナ|ー　ノ。　言いはしないよ。

アラ|ーは、「あるわい∨アライ∨アラ|ー」であり、**セナ|ー**は、「せぬわい∨セナイ∨セナ|ー」であろう。いずれも、**アライ**、**セナイ**と併存している。そのほか、

。イナ|ーデモ　エ|ー。　往ないでもよい。―帰らなくてもいい。

。ナ|ーテ　アカイ　ホ。　なして赤いの。――なぜ赤いの。

が聞かれた。以上の諸例から、話部内の二語にわたる〔rai〕・〔nai〕は、順行同化を起しやすいかと判断される。〔rai〕・〔nai〕であっても、名詞、動詞、形容詞などの一語内では、同化現象はおこりにくい。ただ、形容詞「ない」の場合は、

。ナンド　エー　モン　ナー　カ|ー。　何かいいものはないの。――子供がお八つをねだることば――

のように**ナー**となることもあった。また、助動詞「まい」は、**マー**の形で定着しているようである。

〔ai〕連母音の同化現象が、ごく限られた場合にしか実現しないことは、見島方言の非長門的な一面として、注目される。

(2)　ザ行音

ザ・ゼ・ゾはダ・デ・ドと発音されることがほとんどである。

。ヒダキ　日崎　　。ダラニ　ざらに（たくさん）

。イチデン　一膳　　。デンデン　全然

。カデ　風　　。ドードクダン　同族団

そうした中で、打消過去の助動詞**ザッタ**は**ダッタ**とはならないようである。若い人々の中には、訛音と意識して、ザ・ゼ・ゾと発音する人もある。

(3) /s/〉/h/の現象

サ行子音は語頭ではハ行子音に変ることが多い。

。ヒチョリマス　しちょります　　。ホイジャ　それじゃ

。ヘーカラ　それから　　。ホ　そ（文末詞）

(4) サ行動詞のイ音便

サ行四段動詞は、イ音便形が全年層に用いられている。

。オモイダイテ　思い出して　　。ケナイチョル　貶している

。ノマイテ　飲まして　　。クワイテ　食わして

。オトイタ　落した

(5) バ・マ・ワ行動詞のウ音便

。トーデ　飛んで　　。オーダ　編んだ

。ヌスージョル　盗んでおる　　。ハソーデ　はさんで

。コータ　買った

さきのサ行イ音便とともに、老・少をとわずさかんである。

(6) 「名詞＋を」の音声

末尾母音が〔i〕・〔e〕である名詞に格助詞「を」が続くときは〔…jo〕となる。

。ワシラモ　ナンギョー　ミタ。　わたしどももつらいめにあった。〈宇津〉

。ホニョー　オリョッタ。　苦労したものだ。

藤原与一先生著『方言学』（三省堂）中の「鳥を」の図によると、中国地方ではトリューが優勢であり、四国地方ではトリョー類が優勢である。中国地方でトリョー類がトリュー類とともに分布しているのは、近畿に近いところと、山口県の、主として内海、日本海沿岸部である。私の調査でも、見島では〜ョー類が専用されていた。

以上、音声面の諸事実には、長門方言色が濃い。その中には、助詞「を」を伴う場合の、「トリョー（鳥を）」式音声のように、長門方言的ではあっても、中国方言的ではないものもある。また一方にたとえば〔ai〕連母音の同化しにくいこと、たとえば波動型の文アクセント傾向、などの、一見、非長門的な事実も存する。今後、これらの諸事実の通時的な考察をも行って、見島方言の、長門方言に占める位置を考えてみたい。

2 表現法

表現法を考察するにあたっては、まず、文末の訴え表現に注目したい。

2・1 文末表現法

見島方言における文末訴え法としては、イ音尾や長呼音によるものと、文末詞によるものとが取上げられる。以下にあげる文末詞は、調査の際の自然傍受の過程で得られたもので、文末詞の意図的調査はまだ行っていない。したがって、文末詞の総体をここに尽してはいないことを、はじめにお断りしておきたい。

（1）文末長呼音による訴えかけ

文末を長く引くことが、見島ではよく聞かれるが、ここには、相手に訴えかける気持が託されている。

。イマワ　ダメジャー。　今はもうだめだよ。（残念だけどね。）
。タマゲタ　スキサニ　コーター。　大変好きなので買ったよ。
。オシエテ　ヤレー。＜浦＞（この人に）道を教えてやれよ。
。アス　タベルー。明日食べるよ。

（2）イ音尾による訴えかけ

。コナ　ヒトワ　マタイ　シゴトー　スルイ。　この人は利の確実な仕事をするよ。
。ツライ　モノイ。（冬、海にもぐるのは）つらいものですよ。
＜宇津＞

これらの文末音**イ**の訴えかけは、さきの文末長呼音のそれによく似ていて、かつ幾分強く感じられる。また、上接部の末尾母音が〔o〕・〔u〕の時は、長呼は行なわれにくく、イ音尾をとることが多いようである。このような文末の**イ**を、後に述べる、**ヤ・ヨ**と関連する文末詞と認めることも出来ようが、今はイ音尾――詞と認めるにはやや独立性の弱いもの――と考えておく。「スルイ　ヤー。」「イクイヤー。」のように、**ヤ**と重ねる用法のある点からも、ヤの類とは認めにくい。

イはナ行文末詞の前にあることが多い。

。ワカリマセンイ　ノー。　わからないんですよ。
。カマスオ　ナナメニ　ツッチョル　ワケイ　ネー。　かますを斜めにつっているわけですよ。

イ音尾を有することも、防長方言の一特色と言えようか。これが添わると、品位は中以上となる。

次には文末詞による訴え表現を、単一の文末詞による訴えかけと二つ以上の文末詞を重ねかけた訴えかけとに区別してとりあげた。

（3）単一の文末詞による訴えかけ

①　ノ・ノー・ナ（稀）**・ネ**《新》**・ネー**《新》

。オットリ　コマイ　カイジャ　ノー。　特別に小さい貝だねえ。

ノの類が一般で、**ナ**の用いられることは、**ネ**より更に少ない。今日、長門地方の日本海沿岸域でも、南部にはかなり**ナ**が用いられている。これにくらべて、見島方言は、文末詞**ノ**と**ナ**の使われざまから見るとき、長門方言の古態をよくとどめていると言えよう。

②　ヨ・ヤ・ヤー・ヤイ

。ヨッペド　オドルデス　ヨ。　夜通し踊りますよ。＜浦＞

ヨの訴えが単純な告知であるのに対して、**ヤ**は述部への続きかたも、その訴えかけも、左のようにさまざまである。

。ヤイテ　ヤラー　ヤ。　焼いてやるよ。＜宇津＞
。ドーシンデ　イコー　ヤ。　連れだって行こうよ。
。ミチコ　コイ　ヤー。　道子、来いよ。
。ワシニ　ヤレ　ヤイ。　私に呉れよ。
。ズイブン　オイーヨーニ　アルロー　ヤ。　随分多いようにあるだろう、ね。（実はそうじゃないんだ。）
。イマ　ヤ。　今か。

ヨの品位は中程度であるが、**ヤ**はやや低くて、同輩、目下へのもの

いいにあらわれる。

③ **ド・ドー・ゾ**（稀）・**ゾー**（稀）

。エンコニ　ヤル　ド。　泣いてると河童にくれてやるぞ。

（泣きやめさせようとして、子供に言うことば）

④ **デ・デー・ゼ**（稀）

。ベッタリ　アル　デー。　たくさんあるよ。

ド・デの類はいずれも告知に働いている。**デ**の類は**ド**の類より品位がやや高い。四国方言に聞く、問いかけの**デ**は見島にはない。

⑤ **ダイ・**

。コノ　カ　スッパリ　ウチ　クル　ダイ。　この子は始終わたしの家に来るよ。

ド・デの類が、相手に直面して告げる姿勢のものであるのにくらべると、**ダイ**には、心情を空に言い放つ趣がある。

⑥ **カ・カー・カイ**

問いかけ・疑い・反駁・反語の表現に働いている。

。イラン　コジャロー　カイ。　いらない子なのかしら。（あんな家に嫁にやるなんて。）

。ハー　タキマシタ　カ。　夕方の訪問辞

⑦ **ガ**

。ハー　デキマシタ　ガ。「タキマシタカ。」に応ずる挨拶。

。ミズノ　ホーモ　テンスイイケデ　ゴザンショー　ガ。　田にひく水も雨水をためたものでしょう、ね。

婉曲な主張のものと、相手への念押しのものとの二種類がある。

⑧ **ニー**

。アサジャカラ　ヨラン　ニー。　朝だから人が集まらないんだよ。

ニーは常に否定の助動詞**ン**に続いている。**ニー**の用法はこのように限られているが、本来は「知らニー」であろうか。

福栄村では「知らニー」であることが、波多放彩氏によって報告されている。（『ふるさとのことば――山口県阿武郡福栄村方言』）文末詞**ニー**の成立については、次のように推定することが出来ようか。「～ニー」は、「～ヌイ」の変化したものであろう。**ヌイ**は否定の助動詞「ぬ」にイ音尾の添うたものである。**ヌイ**が**ニー**となったとき、否定の気持をより明確に表現しようとして**ン**が挿入されることは考えられる。**ン**が挿入されると、否定の機能は**ン**に移って、**ニー**はもっぱら心情の訴えのものとなったのであろう。

⑨ **ジャ**（稀）

。カワラー　ジャ。　変らなくってさ、変るよ。

出自にさかのぼれば「変らいでは」が想定されるが、現実態としては、**ジャ**という単純形と認められる。

⑩ **コトイ**

。ガイナ　ヨクワ　セン　コトイ。　むやみな欲張りをするものではないよ。

⑪ **ソ・ホ**

。ツルイ　ヒヤシチョク　ソ。　井戸にひやしておくの。

。コナイダ　ユーチョル　ホ。　この間、言っているの。

防長方言の代表的文末詞**ソ・ホ**は、見島にもさかんに用いられている。**ソ**と**ホ**はほぼ同勢力である。

⑫ **ワイ**

。ヒタワ　ヒロイ　ワイ、　下は広いよ。

⑬ **ノータ〈稀〉**

。ホニョー　オリマスイ　ノータ。　ほねをおりますよ、あなた。

これは老女のことばであるが、土地人にたしかめると、見島では**ノータ**は言わないと答えた。この人以外にも、老女には時に**ノータ**が聞かれたが、旅人の私に〝萩ことば〟を使って敬意を表したのであろうか。

⑭ **ヨー**

。モドレ　ヨー。　帰れよう。

単一の文末詞による訴え表現のものとしては、ほぼ以上のものが得られた。これらの文末詞は以下に示すように、重ねかけて用いられることもある。

(4) 重ねかけの文末詞による訴え

文末詞を重ねかけたものの中には、熟して一語となったもの――複合の文末詞と呼び得るもの――と、二語性が認められるもの――文末詞の累加形ともいうべきもの――とがあるように思える。今はこの両者を区別しないで、すべて重ねかけのものとして取上げていく。

① **ナ行文末詞を末尾に持つもの**

ヨノ・ヨノー・カノ・カノー・カイノ・カイノー・ガノ・ガノー・トイノ・ニーノ・ニーノー・ソイノ・ホイノ・ワノ・ワイノー

ガナ（稀）・デーナ（稀）

カネ・ガネ・ソイネ・ホイネ

これらのうちで、**トイノ**、**ワノ**は、それぞれ**トイ**、**ワ**の単純形文末詞としては得られず、この複合形のみが聞かれた。

。チューカイ　フーミガ　チガイマス　トイノ。　（見島の西瓜と萩の西瓜とでは）まったく風味が違うそうですよ。

。ナンチュー　コター　ナー　ワノ。　なんてこともないわね。

② **ヤ行文末詞を末尾に持つもの**

ドヨー・カヨ・ソヨ・ホヨ

カヤ・カーヤ・ガヤ

③ **アンタを末尾に持つもの**

ノアンタ・ノーアンタ

。メニャー　ミエナイ　ノアンタ。（いくら働いても）嫁の私の働きが目立つことはないのですよ。

。ヌクモリガ　チガワ　ノーアンタ。　ぬくもりかたが違いますよ。

土地人は、見島では**ノンタ**を言わないと答えたが、**ノンタ**の素地はここに認められる。

文末詞を重ねかける時、末尾に位置して訴え性をしめくくるのは、ナ行文末詞とヤ行文末詞、および代名詞系のアンタである。ナ行文末詞は、アンタとの複合・累加の場合に限って上接部となる。

(5) 文末詞と述部との融合

文末詞**ワイ・ワー**は、次のように、述部の末尾と融合することがある。

。マダ　イキチョーライ。　まだ生きているよ。
。ダラニ　アラー。　たくさんあるよ。

ところで、以下のような**ライ・ラー・ラ**は、現実態としては、文末詞として独立したものと見得る。

。トシジャ　ライ。　もう年だよ。老いたよ。
。ナガ　アリマス　ラー。　名前がありますよ。
。カタチンバジャ　ラ。　この下駄は片ちんばだよ。

打消の助動詞「ぬ」で終る述部と融合した場合は**ナイ・ナー**となる。

。クチデ　ユーテ　ヘリャー　セナイ　ノー。　口で小優しく言ったって、別にお金も口もへりはしないよ、ねえ。
。タビワ　デンデン　デマセナー。　他地で暮したことは全然ありませんよ。

総覧して、長門方言文末詞が見島にもよく行われている。ただ、地方(じがた)で聞く**エ**（「ホントエ。本当か。」「イコー　エー。行こうよ。」）は、見島ではまだ聞いていない。一方、見島の老人層に聞く「〜ぬわい」相当のナイ・ナーは地方(じがた)では聞いていない。

2・2　述部表現の二、三について

(1)　動詞・助動詞による敬意表現法

。アネー　オシラレマス。　皆さんがそのようにおっしゃいます。（老人ことば）
・マタ　オイデマセ。　またいらっしゃいませ。
。ヤサシューシテ　ツカサンセ。　お母さんに優しくして下さいよ。
。オヒニ　ナリマシタ　カ。　お目覚めですか。（この頃は聞かない。）
。オダイジ　ナサンセ。　お大事になさいませ。（見送りのことば）
。ユーニ　ハナシサンセ。　ゆっくり話しなさいませ。
。ヤスミンサレ。　おやすみなさい。（夜の辞去の挨拶）
。ネン　オイレサイ　ヤ。　お大事にね。（別れの挨拶）＜宇津＞
。シナレマシタ。　家内が亡くなりました。
。オエロー　ゴザンシタ。　お疲れさまでした。
。シコナシャ　アリマセンロ　カ。　それはあだなではないでしょうか。

これらの表現法が相寄ってなす敬意表現法は、長門方言の敬意表現法の体系をよく示している。これらはお互いの挨拶のことばの中や、あるいは旅の人に対することばの中で用いられる程度で、日常一般にはさほど耳だたしくない。これらのうち、**レル**は、死去を言う**シナレル**、**イカレル**に用いられることが多く、**シナレル**は自己の家族の死去を告げる場合にたび〳〵用いられた。

(2)　推量表現

推量表現では、老・少・男・女ともに、助動詞**ロー**を用いるのが

一般である。

。オバサンガ　オルロー。アノ　ヘン。　おばさんがいるだろう。あの辺よ。（道を教えてくれた女子小学生のことば）

。ココワ　ヤネコイロ。　見島は土がねばいでしょ。

。……アンタ　ウミタイダケ　ウンダロー　ガノ。それがねえあんた、産みたいだけ産んだでしょう、ね。（だから子供は数えきれないくらいいるのよ。）

これらにまじって、**ジャロー・ヤロー**がときに聞かれる。新しく入ったものであろう。過去推量には**タロー**を用いて、**ツロー**は言わない。ある老女は「以前、**ツロー**を言うおじいさんがいた。」と語ったが、私自身はこれを一度も聞くことが出来なかった。長門地方の、日本海沿岸南部で、〃**ロー**は聞かれないが、**ツロー**は行なわれている〃のとは反対の現象が見島に見られるわけである。藤原与一先生の、A DIALECT-GEOGRAPHICAL STUDY OF THE JAPANESE DIALECTS 1956年（FOLKLORE STUDIES VOL. XV）の三〇図「アルダロー　カ」によると、「アルロー　カ」・「アルロ　カ」は土佐・南予によく分布しており、中国地方には山口県に点々と分布が見えている程度である。見島に**ロー**がさかんに用いられていることは、防長的ではあるが、中国方言としては異色のものと言えよう。

（3）可能表現

可能表現の助動詞としては、**レル（ラレル）ヨル・キレル・キラレル**がある。なお、これらのほかに「キキトレマセナー。」のように、**レル**が動詞に融合した形――いわゆる可能動詞を用いることもある。なお、**キレル・キラレル**は、現実にはキレン・キラレンといった否定の言いかたしかないようである。

。ボクヤカラ　ジガ　カカレン。　この筆は先がすりきれてとがっていないから、字が書けない。

。イッショーチュー　モナ　ノミヨラン。　一升などという大量の酒を、とても私は飲むことが出来ない。

。ソレグライノ　コトワ　ノミヨル。　その程度なら飲むことが出来る。

。コイダケノ　ゴチソーワ　クイヨラン。　こんなにたくさんのごちそうは食べきれない。

。ハナシキラレン。（あのころの苦労を私はとうてい）話すことが出来ない。

。キキレンダケ　アル　ヨ。　着物は一生かかっても着こなせない程、たくさんあるよ。

レル（ラレル）は、ことを可能ならしめた外的条件に注目した時に用いられることが多く、**ヨル**は、主として、ことを実現する能力に注目した時に用いられる。**キレン**は前者に近く、**キラレン**は後者に近く用いられている。

ヨルの形態をとるものには「昔は、ホニョー　オリョッタ。」のように進行態をあらわすものもある。進行態の**ヨル**の出自は「居る」であり、一方可能表現の**ヨル**は「得る」であろう。可能表現の**ヨル**は大津郡あたりでも聞かれ、南下して豊浦郡、下関市に入ると**エル**である。九州西南部の佐賀県、長崎県、熊本県などの「飲みユル」・「飲みユッ」は、**ヨル**と一連のものであろう。

(4) 打消過去の表現

過去の否定的事実をあらわすには、老少ともに「**ザッタ**」を用いる。

。シュサンデ　イカレザッタ。　珠算があったので行けなかった。

(5) ゴト表現

。サカナガ　カカッテモ　ニゲンゴト　ネー。　魚がかかっても逃げないようにね、釣針にかかりがある。〈浦〉

主として老人のことばに、ときおり「ようだ」相当のゴトが聞かれる。

(付) 下二段活用

使役の助動詞には**セル**と**スル**がある。

。ワザクト　ワルイ　コト　サセル。　わざと悪いことをさせる。

。センセー　ナカスル　ド。　このごろの子供は先生を泣かせるぞ。

スルは青少年のことばには聞かれない。老人も**セル**を用いることもある。**スル**以外の下二段活用の語としては「ミュル（見ゆる）」を、老人男子から一度聞いただけである。「通ら**ルル**」のように、老人は**ルル**を使うこともあると教えられたが、会話の中で自然に聞き得てはいない。

2・3 接続助詞「サニ」

共通語の接続助詞「から」に相当する助詞には、**サニ**と**カラ**とがある。**サニ**は**カラ**よりはるかに優勢で、全年層の男女によく用いられている。

。オチャガ　ワクサニ　コイ　ヤイ。　お茶がわくから、遊びに来いよ。

。ヨクナサニ　ソネー　アル　ソイノ。　欲が深いから、そんなふうなんですよ。

。エー　コサニ　ドネーデモ　ナルサニ。　気だてのいい子だから、どんなにでも親の思いどおりになるから。

。ガンクージャカラ　ダシャー　セン　ゾ。　あいつはけちんぼだからお金を出しはしないぞ

カラは体言に直接続くことはないが、**サニ**には体言に続ける、「だから」相当の用法もある。**サニ**の出自は明かでないが、「順態接続のニにサを添えたもの」、「古い時代の〃そへに（そゑに）〃と関係のあるもの」、「近畿のサカイニの一連のもの」などが想定されようか。今後の課題としたい。ちなみに、逆態接続には**ソニ**を用いて、「アレダケ　ユーソニ　ドシテモ　キカン　チャ。（あれだけ言うのにどうしても聞かないのだよ。」のように言う。

見島以外の長門地方では、阿武郡で**サニ**を用いることが『全国方言辞典』に見えている。阿武郡福栄村の方言集『ふるさとのことば』にも「行きたいサニ」「それじゃサニ」が示されている。

尾道短期大学講師、江端義夫氏のお話によれば、知多半島、および、尾張と三河との境の地点で、「コマルサニ（困るから）」「ヨーケナイサニ（たくさんないから）」のように、**サニ**が聞かれるそうである。その他、近似の語形態の順態接続の助詞としては、近畿周辺の「セニ」・「セン」・「ショイ」、あるいは長崎県の平戸、壱岐、天草、島原などの「セニ」・「セン」・「シェン」がある。見島方言の**サニ**と出自を同じゅうするものかどうか、これも今後に残る課題である。

3　語詞・語彙

3・1　程度副詞の語彙体系

見島方言の語彙考察の一端として、程度副詞語彙を取上げた。副詞語彙調査を意図しての調査を行ってはいないので、この分野の語彙の総体をすくい得てはいないが、日常の言語生活に多用されているものは、ほぼ聞き得たかと思う。

（1）分量関係の副詞

①　分量・度合の甚しいことをあらわすもの

ここには、「非常に」・「たくさん」に相当する語を取上げている。一語一語の意義・用法の説明を省略して、度合の甚しいことを示す語には○印を、分量の多いことを表わす語には×印を与えた。両用される語には、いずれの印をも与えていない。

○シゴク	ズイブン	ズイーブン	バクダイ（新）
×タクサン	ギョーサン	○ヨーサナ	○ヨーシナ
○ゴッポナ	ゴッポ	○ドヒョーシナ	ドヒョーシ
ジョーニ	×ホガニ（古）	×ダラニ	×ヨーケ
×ヤリ	×ヤリノヤンダー	×ベッタリ	ベーッタリ
○マコトニ	○マコト	○トテモ	○トツケモナク
○エライ	○オソロシュー	○スバラシュー	○タマゲタ
○オモイデニ	オモイデナ		

「タマゲタ」・「オモイデニ」は次のように用いられている。これらはもとの動詞としての語意をいくらかは残しながらも、すでに程度副詞と認め得るものとなっている。

。タマゲタ　キレーニ　アリマス　ノー。　随分きれいですねえ。

。オモイデニ　ヨカッタ。　予想外に大変よかった。

「まったく」・「全部」に相当する副詞としては次のようなものがある。

イヨイヨ　キレーニ　ミナ　ゼンブ

ナンデモカンデモ　ヒャクニンガヒャクニン　バンジバンタン

。イヨイヨ　ホトケサンミタイニ……。まったく仏様のような善人で……。

。ドノ　コモ　キレーニ　オンナ　ドーヨー。　どの子も一滴も酒を飲まず、女同様だ。

次のものは、主として否定の表現と呼応する副詞で「全然」相当である。一般には「陳述の副詞」と呼ばれるものであろうが、これらの中には、述部修飾の機能や、時空名詞修飾の機能をあわせ持つ語もあるので、ひとまずここにあげた。

ガイニ　ガイ　チューニ　チューカイ
カイサナ　カイサ　コッケモクレ　デンデン
テンデ　ネッカラ　ヒトッツモ　ナンサエ

。タビノ　ムカクワ　ガイ　ヤクニ　タタン。　他地から入って来た無角牛は、まったく役にたたない。

。ガイニ　ちがうような　ことは　ない。　まったく違うというようなことはない。

。アメガ　フッタラ　チューカイ　チガウ　ヨノー。　雨が降ったら、西瓜の味が全然違いますよ。

。チューカイ　ムコーニ　アッタ　ヨ。　ずうっと向うにあったよ。

。カイサ　ショモガ　ナイ。　まったく収穫（所務）がない。

。カイサ　コマイ。　まったく小さい。

。コッケモクレ　スガタガ　ナイ。　全然姿が見えない。

以上の副詞語詞の中で、その語形態の注目されるものは、ナ語尾副詞である。

。コノ　カ　ヨーシナ　テガ　ハバシー　ノー。　この子はずいぶん手早いねえ。

。ゴッポナ　オイー　ノー。　ずいぶん多いねえ。

。カイサナ　カイサナ　ショモガ　ナイ。　全然、収穫（所務）がない。

ナ語尾副詞には、オモイデニとオモイデナ、カイサとカイサナのように、ナ語尾とニ語尾をあわせ持つものや、ナのない語形とナのある語形が併用されるものがある。ナ語尾のものには、強勢の語気が感じられる。一方、「カイサナ　モン（つまらぬ奴）」、「ガイナ　ニンゲン（くだらぬ人間）」のように、体言修飾の用法もある。

②　分量・度合の少・小なることをあらわすもの

チョイト　チョイ　チョット　チート
モチート　ダイショー　ショーショー　チョボット
チョボリクソ　チョビット

③　その他の、分量度合関係の副詞

オットリ（特別）　オットーリ　ヤミクモ（むやみに）
エッコロ（よくよく）　エーコロ（適当に）　ダイメン（大分）　ダイブン　オーカタ　ナカナカ　アンマリ
ロクニ　ナンボ

（2）　時間関係の副詞

①　緩急・長短・順序に関するもの

スグ　スグサマ　タチマチニ　マッタリナシニ
イキナリ　イキナリハチベー　オイソラト　オイソラトユーテ

ユックリ　ナガシユー　ジコジコ（じわじわと）イッチ（もっとも）　イチバン

② **継続反復に関するもの**

ズーズー（ずっと―常住）　スッパリ（いつもいつも）　イマニ（今に至るまでずっと）　キョービマデ（今日まで）　ネンジュー　ヨッペド（夜通し）　マイニチ　ヒニモマイニチ（毎日毎日）　カイクリモドリ（くりかえし）　トンビニ（とびとびに）　イチイチ　マタ

③ **その他「時」に関するもの**

ハヤ（もはや）　ハヨーニ（先刻・以前）　テマエゴロニ（その前に）　イマゴロ（当節）

程度副詞語彙の分野において、見島小方言は、長門方言色を濃く見せている。ここには取上げることは出来なかったが、たとえば、形容詞、形容動詞の分野を取上げても、あるいは性向語彙を取上げても、長門方言色はきわめて濃い。音声、表現法にくらべると、語彙面では、地方の長門方言と対比して、異色を示すことが少ないように思える。

おわりに

見島方言は、長門方言に共通する諸特性を有している。とともに一見、非長門的と思える事象をもあわせ有している。文アクセントのある種の型について、あるいは〔ai〕連母音の同化しにくいことについて、あるいは表現法における二、三の事象についてそのことを指摘してきた。それらは、近畿・四国方言への似寄りを見せているとも述べた。しかし、それらを〃非長門的〃と言うには慎重にならざるを得ない。地方の長門方言の調査を進めるにつれて、見島方言独自の事象と思っていたものが、実は長門方言一般に広く認められることが、次第に明らかになってくる。文末詞「ワイ」とマス体の述部との融合のもの　アリマス　ラー　などもその一例である。

長門方言が中国方言一般とはかなりに異なる面を持っていることは、はやく、藤原与一先生が『方言学』中に説いておられる。

今後は地方の長門方言の精査にも努めつつ、見島方言の深い理解に到着すべく励みたい。それによって、見島方言からひるがえって長門方言の真相を明らかにすることも出来るかと思う。

（昭和四六・一〇・二〇）

この小稿には藤原与一先生のご懇切なご指導をいただきました。厚くお礼を申し上げます。見島の方々のあたたかなご協力にも心から感謝申し上げます。